

\*\*\*\*\*

# 同窓会だより

## 同窓会の慶事

副会長 野内 昭 宏

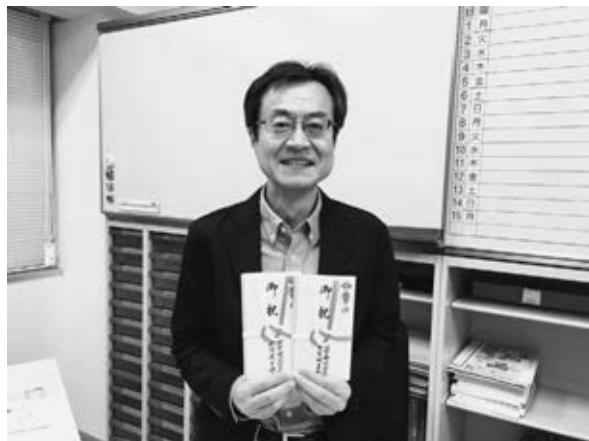
前回の歯学部ニュース以降、同窓会員お二人の教授就任がありましたのでご紹介します。平成30年10月1日就任です。当会からも祝意をお伝えしました。益々のご発展をお祈りしています。

多部田 康一 先生（歯学科27期生） 歯周診断・再建学分野

吉羽 邦彦 先生（歯学科14期生） 口腔生命福祉学科



多部田教授と有松会長



吉羽教授

## 新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅠ「最期まで美味しく食べることが諦めない！訪問歯科ができることー義歯治療から嚥下障害治療までー」に参加して

歯学科37期生 歯周診断・再建学分野  
野中（青木） 由香莉

今回、37期の同期が上記の講演をすると聞き、参加させていただきました。

訪問歯科に特化した医院を札幌で開業したという彼女は、学生の頃に受けた特別講義の1枚のスライドを原点に、ここまで歩んできたとのことでした。確かに、その特別講義は興味深かったことを私も覚えているものの、私にとってはもはや10年以上前の記憶、印象のみの思い出に過ぎず、「なぜコロッケが食べられないのだろう」という、その時の疑問を、その時の情熱を、忘れずに進んできたという彼女の姿勢は、まさに「初志貫徹」そのものでした。そしてまた、そのスライドを、落ち込んだ時、悩んだ時の糧としている、という言葉が、同期だからこそわかる、ここまでのそれぞれの挫折と苦悩と努力を思わせ、一人感慨に耽ったのでした。学生実習でも、彼女が年配の方に対して温かく接していたことを思い出し、現在も、一人ひとりの患者様の人生に寄り添いながら真摯に向き合う姿が、症例の一つ一つからあふれる情熱からも容易に想像できました。

学生の頃から常に何事にも一生懸命だった彼女らしさに溢れる、非常に熱意に満ちた素晴らしい講義でした。吸着義歯の理論を、訪問歯科に適するように独自にアレンジした点、そしてまた食べることを義歯から嚥下まで総合的に診ている点が、評価されているのだと思います。大学で歯周病학을専門としている自身としても、義歯製作の

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

ポイントや、嚙下の評価の実際は、日常の臨床の際の疑問に答える内容で、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。エッセンスに凝縮された90分の講義はとても短く感じ、地元北海道への愛、そして人生の先輩方である患者様への愛情をもって、これからも地域医療に貢献する彼女の講義を、また是非とも聞きたい、と思いました。

同期の講演を、歯学部講堂で聞くということ自体が、非常に感慨深く、また誇らしく思いました。同じ講義室からスタートし、仕事や子育てなどそれぞれの道を歩む同期の面々と講義の後に話しながら、少し落ち込んだり、反省したり、そして何よりまた明日から頑張ろうという活力を頂けた、貴重な機会となりました。



## 新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅡを受講して

歯学科36期生 塚田真弓

平成30年9月30日、東京医科歯科大学名誉教授の高木裕三先生より『小児の歯の外傷治療に必要な知識および注意点』という演題でご講演頂きました。高木先生は、私の父と同期（本学2期生）で、以前より父から高木教授のお話を聞いており、今回のセミナーも楽しみにしておりましたが、期待通りこのセミナーを通じて多くの勉強をさせて頂きました。

現在、私は父の医院で勤務しており、小児の患者様はそこまで多くはありませんが、父が長年近隣の保育園の園医を行っていることもあり、小児の外傷には時々遭遇します。日常の臨床現場において、小児の急患は、迅速に適切な診断と処置が求められます。親御さんが心配して我が子を見ている中で、適切な診断をください、しっかりと説明し、処置を行うには、基盤となる正確な知識が必要となります。今まで、小児の外傷の知識を得るのは、ほとんど書籍からでしたが、書籍は基礎となる部分と臨床での対応が切り離されていることが多く、頭の中で整理するのが大変でした。しかし、今回の高木先生の講演は、基礎的な部分とそれに裏付けされた臨床での対応法が結び付けられており、ずっと頭に入ってくるようでした。先生の講演はとてもわかりやすく、明日からの臨床の場でもすぐに実践できると思いました。

乳歯の外傷では、後継永久歯歯胚への障害を第一に考慮したそれぞれの対応法とともに、どんなケースが重症化しやすいかなど、また、経過観察が良いのか、積極的に処置するべきか、そして、乳歯の再植の是非など、知っているようで知らな

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

い曖昧な知識を正しい理解にかえることができました。

また、幼若永久歯の外傷については、露髄した歯の歯髄保存について、予後を比較すると直接覆髄よりも部分生活断髄法の方が成功率は高いなど、普段臨床において、露髄時に直接覆髄を選択することが多いので、大変勉強になりました。

そして、最後は「小児口腔機能管理加算」に関連して小児の口腔機能発達不全症についてのご説明でした。活字で読んでいてもよくわからない内容をわかりやすくご説明頂きました。

今回の講演会に参加して、普段の臨床がアップデートされ、より臨床における生きた知識を得ることの必要性を強く感じました。とても有意義な時間となりました。大変ありがとうございました。



## 「目に見える、意識した感染対策」を受講して

歯学科32期生 木島 寛

平成30年11月26日、新潟駅南プラーカ内の「ときめいと」にて、「目に見える、意識した感染対策」を受講して参りました。新潟を離れて10年以上経つもので、「ときめいと」と言われましても今ひとつピンと来ませんでした。会場入りしますとお世話になった先生方や懐かしい顔にお会いすることができ、学生時代を思い出させるような里帰り感の中で拝聴させていただきました。

今回の内容は「感染対策」でしたが、毎日の診療で1秒たりとも油断してはいけないうテーマだと思います。考えてみればサービスをする側と受ける側とで、お互いの顔の距離がここまで近いのは歯科と床屋くらいしか思い浮かびません。基本的には外科治療の連続である歯科治療は、血液・体液の飛散が思いのほか広範囲まで及ぶことをデータとして示していただき、そもそもこの職業自体が感染リスクが高いということを私たちは再認識しなければいけないと思いました。

また見落としがちだと思ったのが、口腔ケア時のブラッシングでも汚れは周囲にはねているということです。私は病院歯科勤務なので、病棟の口腔ケアの現場では、ベッドの角度を動かさない方、口腔ケアに抵抗を示し体動する方など様々なケースを目にします。そういった方々に対し一生命懸命になればなるほど口腔内に意識が集中してしまい、周囲への感染物の飛散に気づいていないということは確かにそのとおりの話で、すぐにでも病院職員に伝えなくてはと思うトピックスでした。

さらに肝炎などの感染者が「嫌がられるから」「言いたくないから」などの理由で、自分が感染者であることを医療機関に申告しない人が30%い

\*\*\*\*\*



るという統計結果は、自分が想像していたよりは高い数値で、そういった方々の心情も理解した上で、これはもうこちら側が対策するしかないと思いました。若い頃、先輩に「全ての患者さんがHIV感染者だと思って」診療にあたるようにと言われたことを覚えています。まさに全ての人に対して感染者と同等の対策を講じるスタンダードプリコーションこそがやはり基本中の基本であることを再確認できました。

今回、分かっているようで分かっていないこと、気をつけているつもりで徹底できていないことを、具体的な数字のデータも提示しながら教えて頂いた本講義は、私にとって非常に有意義な時間でした。高木教授が講義の冒頭におっしゃられた「基本的な感染対策は変わらない、でも微生物は日々アップデートしている」という言葉のとおり、東京五輪や大阪万博の開催による新たな感染症の国内流入の懸念もありますし、日々のアップデートに対応できるよう定期的にこういった勉強会には参加すべきと思いました。

最後に、お忙しい中ご講演いただいた高木教授はじめ、企画運営してくださった同窓会学術委員の先生方に深く感謝申し上げます。



## 第6回はびすまカフェ講演会

副会長 野内昭宏

外科には「周術期」という概念があります。外科的処置＝手術にばかり目が行きがちですが、その手術を成功させるために、術前、術中、術後の管理をシームレスに行うことを意味しています。そんなことは歯学部ニュースをお読みになる皆様はご存知でしょう。

それと同様に、当同窓会でも卒業直前の準会員～卒業5年位の会員に対しては、他の世代に比べればやや手厚いサービスを行っています。一つは歯学科6年生と口腔生命福祉学科4年生の皆さんとの「同窓会説明会」、一つは「同窓会費の軽減措置」、一つは「研修歯科医支援塾」、そしてもう一つは、これから紹介する「はびすまカフェ」。最初は出会いの場として会が持たれていましたが、最近では、卒業して少し時間が経過して、卒業間もない頃に比べればかえって悩みが多い若手の道しるべのヒントになるような講演会形式を採っています。





\*\*\*\*\*

今回は、日吉歯科診療所汐留所長の熊谷直大先生（歯学科35期）から「私の挑戦の軌跡」という演題でお話していただきました。聴講された先生から感想を頂戴しましたので、掲載させていただきます。

## 第6回はぴすまカフェ講演会 “私の挑戦の軌跡” を拝聴して

歯学科48期生 新潟大学医歯学総合病院  
臨床研修歯科医師  
浅野 佐和子

熊谷先生の講義は学生時代に一度受講したことがある。その際にアメリカ留学の話をついて、羨ましさと同時にその生活のハードさと夢を具象化する姿勢に驚いた。

平成28年度の歯科疾患実態調査では8020達成率は51.2%。しかしながら、実際に機能している8020は少ないのではないかと。昨今、人生100年時代と言われているが、日吉歯科診療所の掲げる“Keep28”や“歯と全身の寿命を逆転させる”という概念は先を行くもので、全身の健康にとって重要であることは言うまでもなく、私に歯科保健指導を担うひとりの歯科医師として予防型歯科に転換していくための素養を身につけたいと思わせてくれた。

「一度手をついたら修復治療は終わらない」という言葉も研修医の私にとっては印象深い。最適な治療を目標としてもメンテナンス期は次の問題が発見されるまでの期間と捉えている自分もいることも再認識した。心のどこかで治療を中心に

しなければ医院経営は難しいと思っていたので、補綴専門医である熊谷先生が「歯を削らない補綴が一番よい」とおっしゃっていたのはなかなかのショックであった。

今回の講演会を聞いて一番自分に問いかけるべきは“難しい”という言葉で逃げてはいないかということだ。“予防型歯科医院への転換は必要だが難しい”。わかっていると言い訳をする自分。「自分自身が納得できていない状態で患者さんを納得させることができるのか」。難しいアメリカ留学を成功させ、予防歯科の普及に向けて精力的に活躍する先生の姿を見て、“難しいと思う壁を打ち破ること”が夢を具象化できる理由なのだなと思った。

最後に、熊谷先生は「これだけは伝えさせてください」と時間を延長して話をしてくださった。先生のように“これだけは伝えたい”というものを歯科医師としての私は今後持つことができるのか。これを機に自分の挑戦のための準備を進めて行きたいと考える。



講演中の熊谷直大先生

\*\*\*\*\*